ひとくち情宣

寄稿

身立角銅

弁護士

ない
若い仲間たち
実力のないことを嘆いてはいけない
できないことを愛いているばかりでもダメだ
歴史は教えている
三池闘争で鍛えられたつわもの弁護士も
ふるえながら
勾留理由開示の闘いを続けた事実を
三池の活動家たちも
闘いの中でこそ鍛えられたのだという事実を
私たちは知ったのだ
三池労組は教えているだけでなく　それ以上に
一つひとつ学んでいるということを
自信をもとう　若い弁護士仲間たち
そして、全国の闘う仲間たち
一九七七年十一月十日記す

×

角銅弁護士は、改めて紹介するまでもなく、三池大災害裁判担当弁護団の一人として、活動していただいております。ご寄稿大変ありがとうございました。

なお写真は、三池労組の職場活動家と交流する総評弁護団の調査団です。

その歴史は古い
昭和三十五年十一月二十五日
「当分の間」というカッコつきの覚書の中で
新しい労働組合ができたという
大義名分で
会社は三池労組と協定した
だが、宮浦では脈々と
ひとくち情宣が
坑内の保安を守り
職場の命と生活を守る息づかいとして
生きつづけてきた
総評弁護団の大牟田調査活動での
職場活動家との懇談会の中で
その事実が確認できた
歴史ある三池労組という組織の中でも
ひとくち情宣のできるところ
できないところ
そしてまったくできない職場もあった
総評弁護団の若手の諸君
安保闘争も
三池闘争も
未成年時代にチラとしか知ら

北炭 合理化で再提案か

再建計画見直したい

炭労、中央行動を準備

やっと幌内炭鉱が生産を再開したばかりの北炭（萩原会長）は、労働組合に対して再度合理化計画を提示することが明らかになってきた。

十一月十九日付の炭労指令（北炭闘争推進に関する）によれば、北炭資本は「再建計画の再見直し」と称し、十月十九日炭労と協定したばかりの清水沢東部開発の中止、化成工業所の廃止を計画、具体的内容を十二月早々に明らかにする方針だという。

一方政府も、「北炭の内部努力が必要である」「個別企業救済は石炭政策からも考えられない」などとするばかりで、従来からの態度を一歩もでず、国内エネルギー尊重のカケラも見られないらしい。

北炭労連としても、こんな情勢のなかだけに、北炭がきびしい事態にあることを認めつつも、ことが全体に波及することは避けられぬと見て、全道労協、地区労、それに地域との共闘の輪を広げ、北炭・政府への抗議行為をとることを決意している。

炭労は、あくまでも十月十九日協定の線にそう北炭再建事業をすすめることを要求し、中央行動の準備をすすめている。

二次回答で妥結

炭労の期末手当闘争

炭労は十二月十五日、四十万円の期末手当要求をだすと同時に、石炭各社に集合交渉を求め、十八日から始めた団体交渉により要求獲得のため努力を払ってきた。その結果、二十五日の夜、第二波のストライキ突入を前に会側社がだしてきた三十六万五百円の回答を受諾、期末手当闘争を終った。

会社側は、まず二十四日に行なわれた団体交渉の席に、三十五万八千円の一次回答をだしてきたが、炭労は右の回答をつき返し、さらに実力闘争を続けていくことをきめた。その結果、二次回答となったもので、その内訳は次の通りである。

期末手当	三十四万九千円
福利厚生資金	一万一千五百円
合計	三十六万五百円

それに退職者に対する期末手当として、月割り額五万八千百六十七円を獲得した。

ところでこんどの期末手当闘争は十六日の朝日新聞の朝刊は、「戦争でもなければ日本経済はダメだ」との見出しで、稲山日本鉄鋼連盟会長の暴言を紹介した。記事は「不穏、かつ不謹慎な発言」、ときめつけているが、果たしてそんなことですますことができるものなのかどうか。次に、記事の全文を紹介する。

不況脱出は戦争しかないか？

稲山鉄鋼連盟会長が暴言

稲山嘉寛日本鉄鋼連盟会長（新日本製鉄会長）は、十五日の記者会見で、日本経済は現在きわめて困難な事態に追い込まれている、といろいろ述べたてた中で、「どこかで戦争でも起きて、日本へ注文がどっと何千億円もはいらないとだめだ」と不穏、かつ不謹慎な発言。稲山氏によると「日本の経済は朝鮮戦争、ベトナム戦争で注文が舞い込んで発展した。しかしもう戦争はなく、急激な需要はこない。だから経済はむずかしいことになっている」という。

日本経済の高度成長に、朝鮮戦争、ベトナム戦争が大きな役割を果たしたことは経済界でも半ば公然と語られており、最近は「不況から脱するには戦争しかない」といった話を冗談まじりに口にする経済人がときどきいる。稲山氏の発言も、そうした空気の中でなされたものとみられるが、「それでは戦争を望むのか」ときかれては「戦争はないだろう。しかし、戦争がないとだめなくらいに日本の経済は難しいということをいっているのです」と、ややいい方を変えた。

しかし、鉄鋼業界の首脳が、微妙な表現ながらも、日本経済の景気回復と戦争の関係について所見を語ったことは波紋を呼びそうだ。

×

日本資本主義は「富国強兵」「殖産振興」を合い言葉に、内では徹底的に働く国民の自由を奪い、弾圧し、しぼりあげながら、外に向かっては帝国主義的侵略に乗りだし、そして成長・発達を遂げてきたことを知らぬ者はいない。右の稲山日本鉄鋼連盟会長の発言は、わが国の独占支配層がいまもその夢を追い求めていることを何よりも雄弁に物語ることで、それは氷山の一角に過ぎない。むしろ恐るべきは対外侵略体制は、わが国の支配層の間では、も早やはるかに前方にまで伸びているはずだ。右の発言が、ただ「不穏、かつ不謹慎」とだけですまされるものなのかどうか？

三池の仲間と結びながら

全力をあげ闘う決意

三池大災害抗議集会に参加して

森　幹男

自治労荒尾市職は、本年二月に行われた荒尾市長選挙に組織内候補を推せん決定したことにより、現職市長の組織分裂攻撃を受け、七百八十名の組合員が四百七十名に、そして六月には第二組合が作り上げられています。

このような状況の中で、自治労に結集している仲間は労働者階級としての自覚をたかめ、職場に労働組合を組織し、市長選挙闘争の中で得た教訓を実践に生かすたたかいを強めています。

私は十四年前の爆発で叔父を亡くしました。その当時は事故だからということで、運が悪かったのだ、とあきらめていました。その後三池の仲間から、それは人災だと指摘され、命までは売ってはいない、との理解に立つことができました。そして今日、微力ながら荒尾市職四百七十名の仲間とともに、合理化反対のため闘っています。自治体の労働者が合理化に反対して闘うことは、自らの労働条件の改善だけでなく、そのことによって、よりよい住民サービスをも追求するということにもつながっており、この視点を抜きにしての闘いはあり得ません。

この集会に参加し、三池の火は全国に広がり、われわれ自身の闘いの中にも燃えていること、また「労働者は命までは売らない」という言葉を再認識し、全国の仲間とともに明日からの闘いに、いっそう全力をあげる決意を強めました。

×

森　幹男さんは、自治労荒尾市職の書記長として活動していられる方です。尊い手記をいただき、大変ありがとうございました。ともに手をとりあって前進しましょう。がんばってください。

三池大災害抗議集会参加者は、集会終了後デモ。
荒尾地評の旗も、その頭上にひるがえつた。